



東京・私立 立志舎高校

生徒が共に教え合う「ゼミ学習」が

「生きる力」を存分に養う

取材・文／荒尾貴正（本誌編集デスク） 撮影／田中史彦

現在、全国の高校に「習熟度別授業」が広まりつつある。その背景には、文部科学省が03年度に打ち出した「学力向上アクションプラン」のなかで、習熟度別指導の推進が声高に叫ばれていることがある。加えて第2回PISA（OECD生徒の学習到達度調査）の結果を受け、日本の「学力低下」を危ぶむ一定の世論が、それを後押ししているようにも見える。

しかしその一方で、習熟度別授業への不安や批判は少なくない。カリキュラムを効率的に進められるといった長所がある半面、学力差が広がりやすい、生徒の優越感や劣等感を助長しやすいなどの短所も指摘され、導入に二の足を踏む学校も見られる。

学力向上という観点で、習熟度別授業に代

わりうるものとして、「協同学習」という方法がある。一人の教師が大勢の生徒に教えるという従来の形式に固執せず、生徒が共に教え合い、学び合う自由な学習スタイルである。欧米を中心とした世界の多くの教育機関で採用され、たとえばハーバード大学を始めとするビジネススクールや、「世界一」とも評されるフィンランドの義務教育では、標準的な学習方法とされている。

日本では馴染みの薄いこの学習方法を全面的に授業に取り入れている高校が東京にある。東京IT会計専門学校や日本スクールオブビジネスといった専門学校を擁する学校法人立志舎（旧東京IT会計法律学園）が99年に設立した立志舎高校だ。入学に際し学力試

私立立志舎高校

通信制普通科／平成11年創立

生徒数 1年生341人・2年生533人・3年生837人

進路状況 大学 45.0%・短大 5.0%・専門学校 31.0%
就職 10.0%・進学準備 9.0%

（2003年度実績）

東京都墨田区大平2-9-6

TEL 03-5608-1033(代)

URL <http://www.risshisha.ed.jp/index.html>



験を課さず、中学校不登校者や高校中退者にも大きく門戸を開いているユニークな高校である。わが国は80年代～90年代にかけて、全国の高初中退者の数がほぼ毎年10万人を超えていた。そうした事態に対し「信じられない」との思いを抱いたことが高校設立のきっかけになったと、同法人副理事長 千葉一郎氏は語る。

「勉強がわかるようになれば、学校は誰にとっても楽しい場所になります。専門学校の子どもたちの生き生きとした姿から、日々それを実感して参りました。そうした経験から、私どもが高校を始めたならば、不登校者や中退者は出るはずがないという思いが設立当初からありました」



立志舎高校校長
近藤誠一先生



学校法人立志舎 副理事長
千葉一郎先生



上右：教師の講義で授業が始まる。この授業で学ぶポイントを簡潔にレクチャーする
上中：講義の後は、プリント学習の時間。男女混合のゼミの中で見せ合い、教え合う
上左：「私語」が混ざることもあるが、やるべきこと＝課題が決まっているため、大きく振舞わない
下右：演習問題も小テストも、生徒同士が交換し、その場で採点する
下左：友だちに採点されるから気が抜けない、がんばれる、という面もある

こうした自信を裏打ちするのが、立志舎流の協同学習スタイルといえる「ゼミ学習」である。25年ほど前に同学園の専門学校に導入して以来、幾多の改良を重ねながら、数多い資

格・就職合格者を輩出してきたゼミ学習とは、一体どのような学習方法なのだろうか。

できる子どもできない子ども飽きない

「おしゃべり」自由の授業

今回取材でおじゃましたのは、1年の漢文の授業だった。教室に教師が1人、生徒は40人。生徒は6、7人ずつのゼミ、計6班に分かれ、座席は授業開始時からゼミごとにまとまっている（授業写真参照）。授業の最初15分程度で教師が講義をおこなう。この授業では、漢文

のレ点、一・二点の意味、読む順序のルールを教師が解説した。続いて20分程度の演習の時間となる。生徒それぞれにプリントが1枚ずつ配られ、各々がそれを解く。わかる子は黙々と解いていくが、わからない子は隣の生徒に尋ねたり、ゼミ内の誰かに聞いてみたりする。それに対してわかる子が、ごく自然に教えている。授業で習ったばかりのことや、簡単な漢字の読み方など、手を挙げて教師に質問するのは気が引けるようなことでも、友だちになら平然と聞ける。生徒同士で解決できないことは教師に尋ねる。大きな疑問も小さな疑問も即座に解決できるから、生徒の演習が滞ることはない。グループでしゃべり合いながら、見せ合いながら進むので、蚊帳の外のような生徒は見当たらない。一般に、

授業に出席する生徒は多くても、主体的に参加する生徒は限られるものだが、この授業では、40人の生徒全員が「参加」しているように見えた。

授業中の話し合いは勉強のことに限っているものの、おしゃべりが高じて、いつの間にか「私語」になっているゼミもあった。そうした際もこの学校の教師は、あまりヒステリックな怒りかたをしないよう気をつけているという。ゼミ学習が活性化するには、生徒が伸び伸びとコミュニケーションのできる雰囲気づくりが不可欠と考えているためだ。

しかし今回見たところ、生徒の私語は、こちらが想像したよりもはるかに少なかった。和やかな雰囲気ではあるが、教室に一定の緊張感が保たれている印象だ。その秘密は、どうやら小テストにあるらしい。演習問題が終わると、教師が黒板で最後のおさらいをし、その後、5分間の小テストをおこなった。テストともなれば生徒の目の色は変わる。最後に生徒同士が交換して採点することになっているため、友人に「格好悪い」ところを見せたいためにも、より力が入るのかもしれない。採点が終わり、それぞれの生徒が自然な感想を漏らす。「おまえ、なんでこんなにできたの？」などという声が聞かれ、誇らしげな生徒の顔もある。このテストがあるからこそ、授業への集中力が高まるように思える。教師にとつての意義も大きい。小テストによって

教諭
鎌田浩行先生教諭
浦口 剛先生

授業が一方通行で終わらず、生徒の理解度を把握することもできるのである。最後に各ゼミ長(ゼミのリーダーの生徒)が小テストを集め、教師に手渡して授業終了となった。

「ゼミ学習」という聞き慣れぬ名称、ハーバードや北欧で主流のメソッド——といった事前情報から、とてもハイレベルな学習方法を想定していたが、実際のゼミ学習は、予想以上にシンプルだった。普通の授業との違いは、表面上は、「生徒の机を向かい合わせ、互いに教え合うことを許す」ことだけのようにも映った。しかし個々の生徒に目を向けると、一般的な講義形式の授業に出席しているのとは明らかに違うが異なる。休む暇がないのだ。自分の問題を解く。わからないことを人に尋ねる。人から質問され、それに答える。相手が納得しなければ、紙に書いて答える。見る、聴く、話す、書く……。授業中は、五感をフルに働かせることが求められる。居眠りする暇も、頭を休める暇もまったくない。

「講義形式の授業は、生徒にとって無駄が多いんです。板書し、説明する授業で力がつき、満足するのは、実は生徒ではなく教師です。生徒はその間、頭を休めているのです。授業の主役が誰なのかを履き違えてはいけません」と千葉副理事長は語る。

ゼミ学習において、その主役は明らかに生徒だが、脇役である教師にはどのような役割りが求められるのだろうか。同校の鎌田浩行教

諭は次のように語る。

「生徒に力をつけさせようと力むより、楽しませようとする気持ちが重要だと考えています。授業が楽しくなれば、勉強も自ずとできるようにになります。生徒がふだん楽しんでおしゃべりを、内容を勉強に、場所を教室に替えてやってみよう。その方向づけをおこなうのが教師の役割だと思っています」

大人しい生徒には声を掛け、脱線しかけているグループには助け舟を出す。授業で見た、生徒全員を参加させ、楽しませようとする教師の機転と気配りは、簡単な指導技術ではないように映る。実際のところ立志舎高校の教師は、全員が同学園の専門学校を経て高校に派遣されており、ゼミ学習の指導を十分に経験した人々だということだ。

ゼミが頻繁に変わるから 友だちがかならず見つかる

立志舎高校は、ゼミ学習には多くの長所があると指摘する(図1参照)。そのいくつかに解説を加えよう。まずは「学習の集中力が持続する」という点。誰にとっても、話を聞くだけの40〜50分間は長い。理解できなければ、なおさら苦痛だ。鎌田教諭は「ほとんどの生徒が中学校の頃に比べ、授業時間を短く感じると言います」と語る。コミュニケーションしながら

学ぶので、集中力が長時間持続できるのだ。

「教え合うことで、理解が一層深まる」とは、俗に言う「できる子」にも「できない子」にも当てはまるという。なるほどできない子は、できる子に教えてもらうことでわかるようになるだろう。しかしできる子の理解は進むのだろうか? 千葉副理事長は、自身の経験も交えてこう語る。

「自分が理解したと思っている事柄でも、思ってもみない方向から尋ねられると、うまく答えられないことがあります。理解を深めるといふ観点からすれば、人に教えることはたいへん有効です。またたとえば、人に間違えて教えたとしましょう。間違った本人は顔から火の出るくらい恥ずかしいものです。しかしその事柄は、確実に記憶されます」

できる子もできない子も理解が進むから、「落ちこぼれ」「ふきこぼれ」が出にくい。講義形式の授業は、どの生徒のレベルに合わせるかの判断が難しい。上のほうに合わせれば「落ちこぼれ」の、下のほうに合わせれば「ふきこぼれ」の出る可能性がある。習熟度別クラスにしても、そのなかでまたレベル差が生じ、同じ問題を抱えてしまいかねない。ゼミ学習ならば、むしろ生徒に学力差があるほうが良いと近藤誠一校長は説明する。「学力が違いうから質問しやすいし、それによりクラスも活性化するので」

「仲間意識が生まれ、協調性が身につく」の

も、常に教室に会話があるからである。このゼミ学習では2週間に1回程度、ゼミ(班)の組み替えをおこなっている。ゼミが同じになつた生徒同士は、話す機会が格段に増える。それが新たな仲間をつくる機会にもなると鎌田教諭は語る。

「各授業でゼミを頻繁に組み替えることで、人づき合いの苦手な生徒にも、友だちづくりのチャンスが増えると考えています。誰か一人でも友だちができれば、それ以外の生徒たちを受け入れることもできるようになる。そのようにして学力だけでなく、生徒の協調性や社会性も育まれているように感じます」

この学校は不登校や中退などの経験者を数多く受け入れているため、こうした配慮はきわめて重要であるように思う。同じような事

図1 ゼミ学習の長所

- 学習の集中力が持続する
- 教え合うことで、理解が一層深まる
- “落ちこぼれ” “ふきこぼれ” が出にくい
- 仲間意識が生まれ、協調性が身につく
- 表現力・コミュニケーション能力が身につく
- 質問がしやすい
- いろいろな考え方・見方ができるようになる

情を抱える学校にとっても、こうした視点は参考になるだろう。

「習熟度別授業」か

「ゼミ学習」か

ところで立志舎高校には、進路指導部がない。面談や進路説明会、面接指導、学校見学会、適性検査といった進路行事は、基本的に担任主導でおこなわれている。ゼミ学習で生徒個々の主体性を尊重するのと同様、進路選択においても、担任はでしゃばり過ぎないよう心がけているという。では生徒は、どのようにして進路を決めているのだろうか。その点について、浦口剛教諭は次のように語る。

「進路選択に関しても、ゼミ学習が良い影響を及ぼしているように感じます。ゼミ学習をしていると、まわりがよく見えます。得意な問題、不得意な科目、将来の夢など、生徒はお互いのことがわかるようになります。大学へ行くべきか迷っている生徒は、受験勉強に一生懸命取り組んでいる生徒に触発されることがあるし、学部の定まっていな生徒は、はっきり決めている生徒に刺激を受けます。教師や親の言葉よりも、友人の言葉や姿のほうを受け入れやすいようです。私はゼミ学習が、進路の意識づけにとっても大きな役割を果たしていると思っています」

進路実績という点では、まだまだ進学校のより高い実績を残しているわけではないという。しかし学校の評価は年々高まっている。

「卒業生の弟妹や、教職員の子弟の入学するケースが増えました。これはこの学校の評価が高まった証であると受け止めています」と近藤校長は語る。入学倍率は、学校の予想を上回るようになった。一人一人の教師も、一人一人の生徒と接するなかで学校の存在価値を実感することが増えたという。不登校だった子が毎日登校するようになった。人と話せなかつた子が話せるようになった。勉強に興味のなかつた子が楽しく学べるようになった……。そうしたケースは、この学校では枚挙にいとまがない(次ページコラム参照)。

これからの時代に求められるのは「生きる力」であり、自ら学び、考えることのできる「確かな学力」であると文部科学省は提唱している。ゼミ学習は、「生きる力」と「確かな学力」の涵養に、まさしく適しているように見える。その意味でゼミ学習は、キャリア教育の手段のひとつと見ることが出来る。

議論を初めに戻すなら、「習熟度別授業」は、ややもすれば生徒の「生きる力」を否定しかねないことも危惧されている。前向きに取り組んでいる生徒であっても、たとえ教師がそれに気づいていても、生徒本人の望まないクラスに振り分けられる危険性が常につきまとうシステムだからである。講義形式でおこなう

COLUMN

ゼミ学習の感想

■ 姉の薦めで入学を決めた

2年
熊谷真実さん

昨年この学校を卒業した姉からゼミ学習の話などを聞き、楽しそうな学校だなという印象を受けたので受験してみました。

中学の授業は勝手に進んでいって、こちらはただひたすら聞いているだけだったから、「置いていかれる」感じが常にありました。立志舎高校の授業は、友だちと相談しながらリズムよくポンポン進み、ぜんぜん退屈しない。置いていかれそうになっても、友だちか先生が、かならず引き上げてくれます。「授業がわからなくて、つまらない」と言っている他の高校の友だちにゼミ学習の話をする時、「そういうのいいよね」と言われます。

■ 将来は教師になりたい

3年
青柳 開さん

中学にほとんど行かなかった私が入れる高校を探していて、こちらを見つけました。入学したものの、中学の勉強が十分でなかったため、最初は不安でした。そんな私に、ゼミ学習はとても適していたように思います。先生に聞くほどではない質問は、生徒に気軽に尋ねることができるからです。そのおかげで勉強に魅力を感じるようになり、力もついて、大学進学を考えるようになりました。今は特別進学クラスで、毎日夜7時まで勉強しています。1日10時間も一緒にいるから、自然と仲の良い友だちも増えました。この学校には憧れる先生が何人もいます。私も将来は学校の教師になりたいと考えています。

■ 勉強が楽しくなった

04年度卒業
坂口信二郎さん

中学の頃はスポーツに夢中で、入学時点でも、勉強をする気持ちはまったくありませんでした。ところが、この授業は中学校とは違いました。間違っただけいけないとか、テストで良い結果を出さなきゃいけないといったプレッシャーがなく、気楽に、楽しく授業が受けられたのです。中学のときのように、授業中に眠くなったりもしません。結果よりもがんばったところを見てくれるから、間違っことを恐れなくなり、自信がいったような気がします。勉強がどんどん面白くなり、3年になって大学受験を考えるようになって、最終的には推薦で私大の法学部に入学することができました。

一般の授業が、習熟度別授業の必然性を高めるといふ側面もある。なぜなら生徒の理解度に関わらず一方的に進められる授業は、ついていけない生徒を少なからず生み出す。そのために、習熟度別のクラス編成が新たに必要となるのである。

教育学の研究者などの報告によれば、実は「習熟度(能力)別指導」は、国際的には淘汰された指導法であるという見方が一般的だ。過去に導入していたイギリスや米國を

中心とする欧米諸国は、1960年代以降に始まる各国の教育改革において、その廃止を推進した。それは米國などでおこなわれた膨大な数の調査と研究の大部分が、「習熟度(能力)別指導」の無効性と危険性を実証したからだと考えられている。にもかかわらず、日本では普及が加速しようとしている。それはなぜだろうか？

考え得るひとつのポイントとして、我々の先入観がそれを支えている可能性があるよう

に思う。楽しいことは勉強ではない。協力ではなく、競争こそ効果的である。教師の役割は教えることである——。こうした「常識」がどれほど正しいものであるか、一度真正面から疑ってかかる必要があるかもしれない。その真偽を確かめる意味でも、ゼミ学習は有効であるように思う。ゼミ学習の実践は難しくなければいけないということはない。どのような学校でも、試みる価値は十分にある。